

〔資料紹介〕

B・ウェップのR・H・トーニー
あて書簡

(一九四二年六月二日付)

岡 眞 人

周知のことくベアトリス・ウェップ (Beatrice Webb, 1858—1943) は、夫シドニー (Sidney Webb, 1859—1947) とともに、『労働組合運動史』、『産業民主主義』など数多くの古典的著作の共著者として著名であるばかりではなく、一八八四年に創立され、その後一世の間イギリス政治に無視しえない影響を及ぼしてきたフェビアン協会 (The Fabian Society) 第一世代の中心的指導者としても著名である。彼らの類まれなパートナーシップの生涯がイギリス国民に与えた影響の大きさは、夫妻そろってマクドナルド (J. R. MacDonald) アトリー (C. Attlee)、ベヴィン (E. Bevin) といった歴代の労働党首脳とともにウェストミンスター・アビー (Westminster Abbe) に埋葬されていることに象徴されている。

ところで、イギリスにおけるウェップ研究はこの数年来急速な進展をみせつつある。十五年余にわたるロイドン・ハリソン

教授 (Professor Royden Harrison) によるウェップ夫妻の伝記 (authorized biography) 執筆の努力は現在大詰をむかえており、遅くともフェビアン協会創立百周年の一八八四年には刊行予定とのことである。この著作の公刊によりウェップ研究史に新たな画期がしるされることは疑いえないところである。またノーマン・マッケンジー教授 (Professor Norman MacKenzie) の編集によるウェップ夫妻の書簡集が一九七八年に公刊され、さらに八二年末には同じ編者によるベアトリス・ウェップの日記の新版第一巻が刊行された。こうしたウェップ研究進展の背景には、夫妻の生涯にわたる活動の記録が、それ自体イギリス社会史の重要資料であるとの共通の認識が存在しているように思われる。

わたくしはこの数年来、ウェップ夫妻、G・D・H・コール (George Douglas Howard Cole) を中心にイギリス社会主義の思想的研究に従事してきたが、この過程で、一橋大学図書館所蔵の外池文庫の一冊、ウェップ夫妻著『ソヴェト・ロシアの真実』(一九四二年) の中にはさみこまれていたベアトリス・ウェップのR・H・トーニー (Richard H. Tawney) あて手書き書簡を発見した。研究者の間ではよく知られているが、ベアトリスの手稿は独特の字体と速記的省略とによって正確な解読は容易ではない。わたくしは八二年夏の英国滞在の機会に、ウェップ夫妻がその創立と発展に尽力したLSEのアルキビスト、A・ラスピン博士 (Dr. Angela Raspin) の協力をえて、この書簡が新発見であることを確認するとともに、その解読を

完了することができた。以下にその全文と訳を掲げ、あわせてその意義について若干の指摘をおこなうことにした。

書簡原文

Passfield Corner,

Liphook,

Hants.

2/6/42

Dear Mr Tawney,

I wonder whether you received the two volumes of the reissue of our Soviet Communism: a New Civilisation? There is an introduction with a Preface by Bernard Shaw, and the Webbs and the 1935 Constitution of the USSR which I think may interest you? You will notice I end my contribution by a quotation from my nephew Stafford Cripps's last broadcast (as British Ambassador in Moscow) to the Russian people. We are following his adventurous political career with great interest and I am going up to meet him and Isobel next week. Sidney is well and happy but I am rather exhausted with the effort to write *The Truth about Russia!*

Remember me to your wife. Her brother Sir William Beveridge is beginning a notable reconstruction of the world

we live in.

Ever yours

Beatrice Webb

(記)

親愛なるトニー様

わたくしどもの『ソヴェト・コミニズム——新文明か』の再版二巻本、お受けとりいただけましたでしょうか。これにはバーナード・ショーの序文とともにウェップ夫妻の序説、およびソ連邦の一九三五年憲法がつけ加えられており、興味をおもちいただけただけかと存じます。お気づきのことと存じますが、わたくしはこの本の序説をわたくしの甥、スタフォード・クリップスがロシア民衆に向けた(モスクワ駐在イギリス大使としての)最後のラジオ放送からの引用でしめくりました。わたくしどもは、彼の冒険心に満ちた政治活動を大変興味深く見守っており、わたくしは来週には彼とイゾベルに会いにゆくことにしています。シドニーは元気でしあわせにすごしていますが、わたくしは『ロシアの真実』執筆の努力でやや疲れがみえます。奥様よろしくお伝え下さい。彼女の兄弟ウィリアム・ベヴァリッジ卿は、わたくしたちが生活している世界の注目すべき再建事業をおはじめになっておられます。

敬具

一九四二年六月二日

ペアトリス・ウェップ

以上のごとくきわめて短い書簡ではあるが、それはいくつかの点で重要な意義をもつものといえよう。すなわち、まず第一に注目すべきは、この書簡に登場する人物が現代イギリス史上最も著名な人々に属する点である。R・H・トーニー(一八八〇—一九六二)は二十世紀におけるチューダー史研究の基礎を築いた経済史家として有名であるばかりではなく、『獲得社会』、『平等論』などの著作活動と労働者教育協会(WEA)創立当初からの指導教官としての活動などをつうじて、社会思想家、労働運動家としても著名である。彼は第一次大戦直後の石炭委員会(サンキー委員会)でシドニー・ウェップとともに労働側委員をつとめ、一九三一年以降はLSE教授となり、ウェップ夫妻とは親交があった。バーナード・ショー(一八五六—一九五〇)は二十世紀イギリス文芸界の雄であるとともに、半世紀にわたるウェップ夫妻の僚友としてフェビアン顔そのものの存在であった。またスタフォード・クリップス(一八八九—一九五二)はペアトリスの姉(Theresa)の子であるが、彼は一九三〇年代に社会主義連盟(Socialist League)を率いてイギリス人民戦線運動を指導し、第二次大戦中の一九四〇—四二年には駐ソ大使をつとめ、戦後のアトリー労働党内閣では主要閣僚(商相・経済相・蔵相)を歴任した。ウイリアム・ベヴァリッジ(一八七九—一九六三)はいうまでもなく戦後のイギリス福祉国家の基盤となった『ベヴァリッジ報告』の最終責任者であ

る。ウェップ夫妻とは救貧法委員会(一九〇五—一九年)の頃から親交があり、一九一九—三七年にはLSEの理事をもつとめた。以上概観したごとく、この書簡は一流人物間の血縁関係や第二次大戦中の交遊関係を明示的に物語っている点で貴重である。また、前述のラスピン博士によれば、LSEに保存されているウェップ夫妻からトーニーあての書簡は数少なく、この点からもその価値は高いといえよう。

第二に、内容面からみても、この書簡はきわめて興味深い事項を含んでいる。すなわち、この書簡からは、死去(四三年四月三十日)の約一年前(八四歳)という最晩年にもかかわらず、ペアトリスが依然として世界情勢の推移に鋭い関心を保っていたことが看取されうる。文面にあるクリップスのロシア民衆に向けた放送の骨子は、四二年一月に締結されたナチスに対する英ソ同盟条約をふまえて、新世界秩序建設のための両国民の友好協力の強化を訴えたものであり、これこそペアトリス最晩年の希望なのであった。こうした強い動機があったればこそ、ペアトリスは不眠症の悪化に悩まされつつも、一九三七年以来再版の途絶えていた『ソヴェト・コミュニケーション』(三五年初版)に長い序説をつけ加えて出版(四一、四二年)するとともに、その要約版ともいえるべき『ソヴェト・ロシアの真実』出版に全力を傾注したのである。

さらに、この書簡では、約半年後の四二年十二月に最終的結実をみる『ベヴァリッジ報告』に関するペアトリスの関心と高い評価が明示されていることも重要である。ペアトリスはソ連

を新文明と評価し、これとの友好連帯を望みつつも、イギリスにおいてはその連と異なる社会主義への道があり、『ニューリッパ報告』はその方向を示すものと期待してゐたのではなからうか。もちろん、この点は短い書簡のみから速断することはできないが、イギリス型社会主義とソ連型共産主義の關係を最晩年のヘアトリスがどのように考へてゐたかを考察する一つの手がかりを与えてくれるように思われる。

ヘアトリスの日記は最晩年にはとびとびであり、四二年六月二日の項は存在しないだけに、この欠落をさうめる意味でも、以上に紹介した書簡の資料的価値は高いとらえよう。

(1) S. & B. Webb, *The History of Trade Unionism*, London, Longmans, 1894, rev. ed., 1920. 荒畑寒村監訳、飯田・高橋訳『労働組合運動の歴史』上下巻、日本労働協会、一九七三年。

(2) S. & B. Webb, *Industrial Democracy*, London, Longmans, 1897. 高野岩三郎監訳『産業民主制論』法政大学出版局、一九六九年。

(3) 拙稿『ウェブ夫妻の社会主義像試論——第一次大戦直後の確立期における『大英社会主義國の構成』を中心に』『社会思想史研究』第二号、シネルヴツ書房、一九七八年、を参照。

(4) 八二年夏、ウォーリック大学を訪問された山田秀雄教授の談による。

(5) Norman MacKenzie (ed.), *The Letters of Sidney and*

Beatrice Webb, 3 vols., London, Cambridge University Press, 1978.

(6) N. & J. MacKenzie (ed.), *The Diary of Beatrice Webb*, vol. one, 1873-1892, London, Virago Press, 1982.

題刊本とトビは Margaret Cole (ed.), *Beatrice Webb's Diaries, 1912-1924* (London, Longmans, 1952), Do., 1924-1932 (London, Longmans, 1956) の二冊がある。

が、マッケンジーによる今回の編集は一九二二年以前と三二年以降をも含み、二二年—三二年についても増補がなされることである。なお、日記の全部をカバーするマイクロ・フィルム版は Harvester Press から入手可能である。以上の他にも、夫妻の主要著作が次々にリプリントされてゐることも付記しておく。

(7) Cf., M. Cole, *Beatrice Webb*, London, Longmans, 1945, p. 189. "Her life history is the social history of two generations, ……".

(8) S. & B. Webb, *The Truth about Soviet Russia*, London, Longmans, 1942. (Toke C. 262)

(9) 外池文庫は本学出身の外池五郎三郎氏(一九一〇年本科卒)がロンドンの古書籍商 P・イートン氏 (Peter Eaton) のコレクションを一九五六年に購入し、本学図書館に寄贈されたもの(収蔵一九五九年)である。イートン氏は消費協同組合発祥の地ロッチデール (Rochdale) 出身であり、そのロッチデールは協同組合を主題とした『二一三一冊の

本と小冊子、四七点の手稿類からなつてゐる。この中にはロバート・オーエン (Robert Owen) の書簡なども含まれており、これについては都築忠七教授がすでに紹介されてゐる。Chushichi Tsuzuki, Japanese Archives Relating to British Labour History (I), *Society for the Study of Labour History Bulletin*, No. 7, Autumn 1963, pp. 29—33. また、外池文庫の一般的紹介としては、山口隆二助教 (当時) による次のものがある。「外池文庫について」『橋論叢』四五巻一号、一九六一年、九七—九頁。さらに『外池文庫目録』(一橋大学図書館、一九五九年)の冒頭にも短い「解説」がある。以上については、都築教授とともに、外池正治教授からのお話が貴重な参考となった。記して感謝したい。なお、いかなる経緯により、イーソンのコレクション中にニアトリスのトニーあて書簡が含まれてゐたかはこのところ不明である。

(10) London School of Political and Economic Science (一八九八年創立)。その設立の経緯とウエブ夫妻の係わりについては次を参照。Beatrice Webb, *Our Partnership*, London, Longmans, 1948, chapter II. I の日図書館の正式名称は British Library of Political and Economic Science であり、膨大なウエブ・ロマンソンを所蔵してゐる。ラスビン博士は手稿類や希覓本担当の専門家であり、私の調査に協力をおしまれなかつた。記して感謝する次第である。

(11) R. H. Tawney, *The Acquisitive Society*, London, Bell and Sons, 1921. 山下重一訳「獲得的社会」、関嘉彦他『イギリスの社会主義思想』河出書房新社、一九六三年。

(12) R. H. Tawney, *Equality*, London, Allen and Unwin, 1931.

(13) トニーの影響が今日にまで及んでゐる一つの証拠として、一九八一年春に労働党から分離して結成された社会民主党 (SDP) の政策研究集団 (ちょうど労働党に対するフェミニン協会のようき存在) がトニー協会 (The Tawney Society) の名称を採用してゐることをあげることができる。その第一回総会は八二年十月に開催された。

(14) クリップスはトニーの著作に感銘して労働党に入党したと云われぬ。 Cf. Colin Cooke, *The Life of Richard Stafford Cripps*, London, Hodder and Stoughton, 1957, pp. 106—8.

(15) W. H. Beveridge, *Social Insurance and Allied Services*, London, HMSO, 1942. 山田雄三監訳『社会保険および関連サービスマーケティング報告』至誠堂、一九六九年。

(16) Quoted in S. & B. Webb, *Soviet Communism, A New Civilisation*, London, Longmans, 1942 (4th ed.), pp. II—III. Also, Do., *The Truth about Soviet Russia*, 1942, p. 54.

(17) シトニーは一九三八年に卒中にかかり、その後一応の

